# 普請中

森鷗外

渡辺参事官は歌舞伎座の前で電車を降りた。雨あがりの道の、ところどころに残っている水たまりを避けて、木挽町（こびきちょう）の河岸（かし）を、逓信省の方へ行きながら、たしかこの辺の曲がり角に看板のあるのを見たはずだがと思いながら行く。

人通りはあまりない。役所帰りらしい洋服の男五六人のがやがや話しながら行くのにあった。それから半衿（はんえり）のかかった着物を着た、お茶屋のねえさんらしいのが、なにか近所へ用たしにでも出たのか、小走りにすれ違った。まだ幌（ほろ）をかけたままの人力車が一台あとから駈け抜けて行った。

果して精養軒ホテルと横に書いた、わりに小さい看板が見つかった。
河岸通りに向いた方は板囲いになっていて、横町に向いた寂しい側面に、左右から横に登るようにできている階段がある。階段はさきを切った三角形になっていて、そのさきを切ったところに戸口が二つある。渡辺はどれからはいるのかと迷いながら、階段を登ってみると、左の方の戸口に入口と書いてある。
靴（くつ）がだいぶ泥になっているので、丁寧に掃除をして、硝子（ガラス）戸をあけてはいった。中は広い廊下のような板敷で、ここには外にあるのと同じような、棕櫚（しゅろ）の靴（くつ）ぬぐ

いのそばに雑巾（ぞうきん）がひろげておいてある。渡辺は、おれのようなきたない靴をはいて来る人がほかにもあるとみえると思いながら、また靴を掃除した。

あたりはひっそりとして人気（ひとけ）がない。ただ少しへだたったところから騒がしい物音がするばかりである。大工がはいっているらしい物音である。外に板囲いのしてあるのを思い合せて、普請（ふしん）最中だなと思う。

誰（たれ）も出迎える者がないので、真直（まっす）ぐに歩いて、つき当って、右へ行こうか左へ行こうかと考えていると、やっとのことで、給仕らしい男のうろついているのに、出合った。

「きのう電話で頼んでおいたのだがね」

「は。お二人さんですか。どうぞお二階へ」

右の方へ登る梯子（はしご）を教えてくれた。すぐに二人前の注文をした客とわかったのは普請中ほとんど休業同様にしているからであろう。この辺まで入り込んでみれば、ますます釘（くぎ）を打つ音や手斧（ちょうな）をかける音が聞えてくるのである。

梯子を登るあとから給仕がついて来た。どの室かと迷って、うしろをふりかえりながら、渡辺はこういった。

「だいぶにぎやかな音がするね」

「いえ。五時には職人が帰ってしまいますから、お食事中騒々しいようなことはございません。しばらくこちらで」

　さきへ駈け抜けて、東向きの室の戸をあけた。はいってみると、二人の客を通すには、ちと大きすぎるサロンである。三所に小さい卓がおいてあって、どれをも四つ五つずつ椅子（いす）が取り巻いている。東の右の窓の下にソファもある。そのそばには、高さ三尺ばかりの葡萄（ぶどう）に、暖室で大きい実をならせた盆栽がすえてある。

　渡辺があちこち見廻していると、戸口に立ちどまっ

ていた給仕が、「お食事はこちらで」といって、左側の戸をあけた。これはちょうどよい室である。もうちゃんと食卓がこしらえて、アザレエやロドダンドロンを美しく組み合せた盛花（もりばな）の籠（かご）を真中にして、クウウェエルが二つ向き合せておいてある。いま二人くらいははいられよう、六人になったら少し窮屈だろうと思われる、ちょうどよい室である。

渡辺はやや満足してサロンへ帰った。給仕が食事の室からすぐに勝手の方へ行ったので、渡辺ははじめてひとりになったのである。

金槌（かなづち）や手斧の音がぱったりやんだ。時計を出して見

れば、なるほど五時になっている。約束の時刻までには、まだ三十分あると思いながら、小さい卓の上に封を切って出してある箱の葉巻を一本取って、さきを切って火をつけた。

不思議なことには、渡辺は人を待っているという心持が少しもしない。その待っている人が誰であろうと、ほとんどかまわないくらいである。あの花籠の向うにどんな顔が現れて来ようとも、ほとんどかまわないくらいである。渡辺はなぜこんな冷澹（れいたん）な心持になっていられるかと、みずから疑うのである。

渡辺は葉巻の煙をゆるく吹きながら、ソファの角の

ところの窓をあけて、外を眺めた。窓のすぐ下には材木がたくさん立てならべてある。ここが表口になるらしい。動くとも見えない水をたたえたカナルをへだてて、向う側の人家が見える。多分待合かなにかであろう。往来はほとんど絶えていて、その家の門に子を負うた女が一人ぼんやりたたずんでいる。右のはずれの方には幅広く視野をさえぎって、海軍参考館の赤煉瓦（あかれんが）がいかめしく立ちはだかっている。

渡辺はソファに腰をかけて、サロンの中を見廻した。壁のところどころには、偶然ここで落ち合ったというような掛け物が幾つもかけてある。梅に鶯（うぐいす）やら、浦

島が子やら、鷹やら、どれもどれも小さい丈の短い幅なので、天井の高い壁にかけられたのが、尻を端折ったように見える。食卓のこしらえてある室の入口を挾んで、聯のような物のかけてあるのを見れば、某大教正の書いた神代文字というものである。日本は芸術の国ではない。

渡辺はしばらくなにを思うともなく、なにを見聞くともなく、ただ煙草をのんで、体の快感を覚えていた。

廊下に足音と話し声とがする。戸が開く。渡辺の待っていた人が来たのである。麦藁の大きいアンヌマリイ帽に、珠数飾りをしたのをかぶっている。鼠色

の長い着物式の上衣の胸から、刺繍（ししゅう）をした白いバチストが見えている。ジュポンも同じ鼠色である。手にはウォランのついた、おもちゃのような蝙蝠傘（こうもりがさ）を持っている。渡辺は無意識に微笑をよそおってソファから起きあがって、葉巻を灰皿に投げた。女は、附いて来て戸口に立ちどまっている給仕をちょっと見返って、その目を渡辺に移した。ブリュネットの女の、褐色（かっしょく）の、大きい目である。この目は昔たびたび見たことのある目である。しかしそのふちにある、指の幅ほどな紫がかった濃い暈（かさ）は、昔なかったのである。

「長く待たせて」

ドイツ語である。ぞんざいなことばと不吊合い（ふつりあ）いに、傘を左の手に持ちかえて、おうように手袋に包んだ右の手の指さきをさしのべた。渡辺は、女が給仕の前で芝居をするなと思いながら、丁寧にその指さきをつまんだ。そして給仕にこういった。

「食事のいいときはそういってくれ」

給仕は引っ込んだ。

女は傘を無造作にソファの上に投げて、さも疲れたようにソファへ腰を落して、卓に両肘（りょうひじ）をついて、だまって渡辺の顔を見ている。渡辺は卓のそばへ椅子を引き寄せてすわった。しばらくして女がいった。

「たいそう寂しいうちね」
「普請中なのだ。さっきまで恐ろしい音をさせていたのだ」
「そう。なんだか気が落ち着かないようなところね。どうせいつだって気の落ち着くような身の上ではないのだけど」
「いったいいつどうして来たのだ」
「おとつい来て、きのうあなたにお目にかかったのだわ」
「どうして来たのだ」
「去年の暮からウラヂオストックにいたの」

「それじゃあ、あのホテルの中にある舞台でやっていたのか」
「そうなの」
「まさか一人じゃあああるまい。組合か」
「組合じゃないが、一人でもないの。あなたもご承知の人が一しょなの」少したためらって。「コジンスキイが一しょなの」
「あのポラックかい。それじゃあお前はコジンスカアなのだな」
「いやだわ。わたしが歌って、コジンスキイが伴奏をするだけだわ」

「それだけではあるまい」
「そりゃあ、二人きりで旅をするのですもの。まるっきりなしというわけにはいきませんわ」
「知れたことさ。そこで東京へも連れて来ているのかい」
「ええ。一しょに愛宕山（あたごやま）に泊まっているの」
「よく放して出すなあ」
「伴奏させるのは歌だけなの」Begleiten（ベグライテン）ということばを使ったのである。伴奏ともなれば同行ともなる。
「銀座であなたにお目にかかったといったら、是非お目にかかりたいというの」

「まっぴらだ」

「大丈夫よ。まだお金はたくさんあるのだから」

「たくさんあったって、使えばなくなるだろう。これからどうするのだ」

「アメリカへ行くの。日本は駄目（だめ）だって、ウラヂオで聞いて来たのだから、あてにはしなくってよ」

「それがいい。ロシアの次はアメリカがよかろう。日本はまだそんなに進んでいないからなあ。日本はまだ普請中だ」

「あら。そんなことをおっしゃると、日本の紳士がこういったと、アメリカで話してよ。日本の官吏がとい

いましょうか。あなた官吏でしょう」
「うむ。官吏だ」
「お行儀がよくって」
「おそろしくいい。本当のフィリステルになりすましている。きょうの晩飯だけが破格なのだ」
「ありがたいわ」さっきから幾つかのボタンをはずしていた手袋をぬいで、卓越しに右の平手を出すのである。渡辺は真面目(まじめ)にその手をしっかり握った。手は冷たい。そしてその冷たい手が離れずにいて、暈(くま)のできたために一倍大きくなったような目が、じっと渡辺の顔に注がれた。

「キスをして上げてもよくって」
渡辺はわざとらしく顔をしかめた。「ここは日本だ」
たたかずに戸をあけて、給仕が出て来た。
「お食事がよろしゅうございます」
「ここは日本だ」と繰り返しながら渡辺はたって、女を食卓のある室へ案内した。ちょうど電燈がぱっとついた。
女はあたりを見廻して、食卓の向う側にすわりながら、「シャンブル・セパレエ」と笑談（じょうだん）のような調子でいって、渡辺がどんな顔をするかと思うらしく、背伸びをしてのぞいてみた。盛花（もりばな）の籠が邪魔になるのであ

る。
「偶然似ているのだ」渡辺は平気で答えた。
シェリイを注ぐ。メロンが出る。二人の客に三人の給仕が附ききりである。渡辺は「給仕のにぎやかなのをご覧」と附け加えた。
「あまり気がきかないようね。愛宕山もやっぱりそうだわ」肘を張るようにして、メロンの肉をはがして食べながらいう。
「愛宕山では邪魔だろう」
「まるで見当違いだわ。それはそうと、メロンはおいしいことね」

「いまにアメリカへ行くと、毎朝きまって食べさせられるのだ」

二人はなんの意味もない話をして食事をしている。とうとうサラドの附いたものが出て、杯にはシャンパニエが注がれた。

女が突然「あなた少しも妬(ねた)んではくださらないのね」といった。チエントラアルテアアテルがはねて、ブリユウル石階の上の料理屋の卓に、ちょうどこんなふうに向き合ってすわっていて、おこったり、なかなおりをしたりした昔のことを、意味のない話をしていながらも、女は想い浮かべずにはいられなかったのであ

る。女は笑談のようにいおうと心に思ったのが、はからずも真面目に声に出たので、くやしいような心持がした。

渡辺はすわったままに、シャンパニエの杯を盛花より高くあげて、はっきりした声でいった。

〝Kosinski（コジンスキイ） soll（ゾル） leben（レエベン） !〟

凝り固まったような微笑を顔に見せて、黙ってシャンパニエの杯をあげた女の手は、人には知れぬほど顫（ふる）っていた。

× × ×

まだ八時半ごろであった。燈火の海のような銀座通りを横切って、ウェエルに深く面(おもて)を包んだ女をのせた、一輛の寂しい車が芝の方へ駈けて行った。

明治四十三年六月

底本：「日本の文学　２　森鷗外（一）」中央公論社
１９６６（昭和41）年１月５日初版発行
１９７２（昭和47）年３月25日19版発行
初出：「三田文学」
１９１０（明治43）年６月
入力：土屋隆
校正：小林繁雄
２００５年10月５日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。